

「おけよ」そう言っておじいちやんはその日の新幹線で帰つてゆきました。

その日少し早く帰ってきたお父さんとおじいちゃんが話しています。おじいちゃんの前ではお父さんはまだ子供みたいで、「おじいちゃん、おれは近ごろ神社のお世話をさせて貰っているんだ」「ほほーそれはいいことだ」とおじいちゃん、「それでねー」とお父さんは続けます。「もうすぐ秋祭なんだがこの町もミコシのかき手が少なくて三年前からミコシは出さなかつたんだが今年は是非出したいと

「おけよ」そう言つておじいちゃんはその日の新幹線で帰つてゆきました。
それから一ヶ月あまりぼくは自分がバーべキューになるところを想像すると怖くて怖くて夜もろくろく眠れません。一生懸命平気な顔でいるのですがトサカの色も悪いようです。そして九月の半ばすぎました。またおじいちゃんがやつてきました。

だ」「ふん、それで?」と拍じいちゃんは乗りだした。「ところがおミコシの屋根に飾るホウオオという金色の鳥がどこを搜しても見つからないんだ。それでおれは考えたんだが、うちのオンドリをミコシの屋根にとまらせたらどうだろう」「それは面白い、あの鳥に金粉でも塗ってな」とおじいちゃんの太き声、さあ大変なことになりました。

の行く先々の町や通りで皆さんが「あれこの鳥生きてるよ」と言つて驚いたり喜んだり、しつばにさわってくれる人までありました。

そしてこの栄光の一日が終つた時、おじいちゃんが言いました。「一度は神様におつかえした鳥だ、バーベキューにして食べるわけにも行くまゝで、死ぬまでこの家で飼つてやれ」この言葉を聞いてぼく

その日少し早く帰ってきたお父さんとおじいちゃんが話しています。おじいちゃんの前ではお父さんはまだ子供みた
いです。「おじいちゃん、おれは近ごろ神社のお世話をさ
にとつては一番名誉なことなのです。ぼくはだんだん緊張してきました。そしてあつと
いう間に一週間が過ぎ、いよいよお祭の日の当日です。

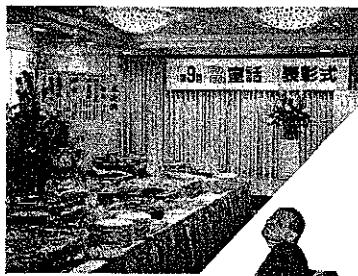
と同じくらい喜んでくれたのはぼくの飼い主の勉くんでした。ぼくは何という幸せな島でじょう。ぼくは喜びのあまり夜空に向って一声大きく唱きました。

人々、その他大勢の人々
と神様に
感謝した
い気持ち
で一杯です。

表彰式に出席して

三好
学

僕が飛行機に乗るなんて、それこそオ
ンダリコーキチがおミコシの上に乗るよう



これが大阪の表彰式に出席が決まりた時、私の頭に最初に浮かんだ言葉でした。そして十一月二十四日私は遂に空を飛んだのです。

さて表彰式はと申しますと、それはもう私の想像を遥かに越えた素晴らしい式でした。作家の先生方のお誉めの言葉を戴いた後、すごく豪華なお部屋で立食パーティーがありまして、私など普段見たことのないようなご馳走が並んでいました。とにかく私にこのような素晴らしい体験をさせて下